

論文

古代ローマ奴隸制工・鋳業史 —展開と終焉— (上)

馬 場 典 明

目次

緒言

第一章 ローマ工業奴隸制の経済的背景 —共和政末・帝政初期の陶器工業—

はじめに

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの生産 —成立と展開—

第二節 経済的背景

おわりに —帰結と展望—

第二章 アレティウム=テラ・シギルラータの終焉 —ローマ奴隸制衰退相の再検討— (次号)

はじめに

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの終焉 —学説整理—

第二節 アレティウム=テラ・シギルラータ工業の拡大諸態様と衰退

おわりに

第三章 ローマ鋳山業の展開 (以下未完)

第一節 共和政末・帝政初期のローマ鋳山業の状態—イタリア及び西部諸属領における—

第二節 共和政末・帝政初期の東部諸属領におけるローマ鋳山業の状態

第四章 ローマ鋳山業における奴隸制と《コロヌス》制

第一節 ローマ帝政期における鋳山《COLONVS》—『ウィパスカ鋳山碑文』研究—

第二節 ローマ鋳山業における奴隸制と『コロヌス』制 —Leges Metallorum 再考—

付 論 ローマの鋳山奴隸

第五章 ローマ経済における『貴顕身分』理念

第一節 営利不名誉論をめぐる諸学説

第二節 >Ps. Claudianum< をめぐる諸学説とその問題点

第三節 Liv. XXXI, 63, 3-4

——“Quaestus omnis patribus inecorus visus” に関する予備的検討 ——

補論 『ユーリア法』における船舶所有の禁止

第六章 《T・RVFRENI》と《C・VIBIENI》 —— ローマ貴族『営利不関与原則』の再検討 ——

序

第一節 アレティウム=テラ・シギルラータの成立

第二節 T. Rufrenus と C. Vibienus

緒言

古代ローマ世界で最も大々的に奴隷制の展開が知られたのは、言うまでもなく市場を前提として殆ど専ら「貴顕身分」によって占められたイタリアの大土地所有においてであった。だが併し大規模な奴隷労働に依拠したのは、そこだけでは決してなかった。若干の私的工業のみならず、貴金属を中心とした鉱山業もまた、それなしには成立、展開され得なかったからである。

史料事情の然らしめる所として、専ら物証を中心とする考古学的諸知見と碑文・金石文関係史料の両者に限定され、それ以外には殆ど抛るべき直接的な手懸かりは残されていない。一定程度以上の作業進展に阻止的にのみ作用するこの諸制約の故に、ローマ工・鉱業に対する経済史的接近は困難を極める。併しそれでもなお、丹念な事例の集積に拠ってはじめて、古典諸情報ではもはや如何ともなし難い商品流通の実態が浮かび上がる。とりわけ私的商品生産と流通(貴族的関与があろうとなかろうと)の史料事情がそうである。それを介して初めて、最も直接的な形で地中海規模での経済的かつ文化的な『ローマ世界像』の実状把握に新たな光を当て得ることになる。さらにまた奴隷労働依拠の大々的な諸生産に関して、その内的構造への踏み込みが可能になると同時に、終焉への道もまた展望され得ることになる。

その一つが、エトルーリア都市アレティウム(Arretium: 現 Arezzo)を中心に大々的な生産が展開され、紛れもなく私の商品として殆ど地中海全域にわたって事実上市場を支配した——その故に『アレティウムもの』*vasa Arretina* の名で呼ばれた——赤釉浮彫の陶器『テラ・シギルラータ』*terra-sigillata* であった。それらに押捺されたアトリエ主、奴隷・解放奴隷個々銘の収集と分析によって、私的大規模工業の展開と終焉の実態が復元可能になる。

いま一つは、共和政期、ローマ市民の公有地(ager publicus populi Romani)を構成し、労働諸力と運営の悉くが徴税請負人(publicani)及びその団体(socii)に委ねられ、次いで帝政期、ローマ皇帝庫(fiscus)に帰属し、皇帝代理(procuratores)の管理下に置かれた貴金属を中心とする鉱山業であった。労働の実状が克明に誌されたのみならず、鉱山区運営にまで及んだ古典諸報告と鉱山諸法の碑文関係史料の両者が比較的豊富に残されたのもその故にであり、ローマ大規模奴隷制に関して、前者と並んでその代表的な事例を提供することになる。

『農業』以外の恒常的利殖手段としての小商業・金融業と並んで、『工業』関与、とりわけ「ローマ貴顕身分」のそれは、併しさらに、このような経済史的処理の枠内にとどまり得ないいま一つ別の社会的かつ政治的な新課題に連なることになる。

共和政中期のカトー、末期のキケローを引き合いに出すまでもなく(Cato, *De agr. cult. praef.* 1; Cic. *De off.* I, 15)、農業以外の「利殖」*quaestus*を図ることは、とりわけ貴顕身分にとっては「恥ずべき」であり、「品位に悖る」と見做した反面、直接・間接の別を問わず統治階級自身が頻繁に示した(恒常的とさえ見做されねばならない)利得諸機会への関与事實は、ローマ経済史の重要課題の一つとしてとどまり続けた。何故ならば、第一に「統治身分営利不関与」の原則には、古代市民共同体の『内的在り方』の最も直截的な表現が読み取られねばならないからである。そ

して第二には、商品・貨幣経済のさらなる進行に伴って必然化されたであろう、ローマ貴顕身分社会の『構造的変化』が看取され得る、と考えられ得るが故にである。

筆者は先に、イタリア奴隷制大土地所有の展開と終焉に関して、『ラテン農書』を殆ど専らとせざるを得ない史料制約を今一步踏みだして、新地平を拓くべく図った一連の作業として、ローマ貴顕身分を最主要担い手とした大土地所有制と構成労働諸力の実状を克明に記した私の商品——所謂「粗陶器」＝《OPVS DOLIARE》の網羅的な銘文収集と分析によって、農耕以外の利得諸機会に対する‘clarissimus vir’, ‘clarissima femina’の名の下で看取された、2～3世紀に集中的な貴顕身分の恒常的な利害関係の新事実を明らかにした。ローマ皇帝もまた《CAES・N・》、次いで《DOM・N・》の名によって全く同様であった。

『営利不関与』に表現された貴族的理念一般の、もはや単なる「抵触行為」だけでは済まされ得ない、『古代市民共同体』の構成論理に他ならない。終焉をもまた視野に入れた成立と展開の諸相が、改めて問題とされねばならない。検討は専ら学説整理による問題抽出段階に止まったが、ローマ奴隷制工業史の延長上に追加した所以である。

付記

第一章の初出(『西洋史学論集』5、1958年、1-20頁)以後に刊行されたローマ工業に関する筆者の素描は、『古代史講座』第九卷(学生社 1963年)所収の拙稿、「ローマの工業——都市経済と奴隷制——」を参看されたい。今日ではもはや古いのは百も承知だがそれに代わるべき邦語文献が見当たらないこともあって、敢えて列挙せざるを得ない。

さらにまた、例えばテラ・シギルラータ押捺銘から知られるアトリエ主と構成労働力数が、今日では大幅に異なっているのを初めとして、その後の情報量の急増に伴う収集と分析の精緻化(vgl. e. g., Prachner, G., *Die Sklaven und Freigelassenen im arretinischen Sigillatagewerke*, Wiesbaden 1980, SS. 49-51, 59-63 et al.; Rulle, G., ‘The Internal Organization of the Arretine Terra Sigillata Industry: the Problem of Evidence and Interpretation’, *JRS*. LXXXVII, 1997, pp. 147-155)もまた取り込まれねばならないが、差当り初出稿における筆者の作業それ自体が意味をもつために、ここでは精々の所、新事例を追加するだけに止める。

第一章 ローマ工業奴隷制の経済的背景 ——共和政末・帝政初期の陶器工業——

はじめに

本稿の目的は、共和政末期より帝政初期にかけて、急激に拡大する奴隷解放の動き——換言すればローマ奴隷制度の変貌——の諸相を経済的側面より特に「工業」において眺めようとするものである。しかしその全面的検討は限られた紙幅上到底不可能であって、ここでは専ら中心を陶器工業に置きたい。

そもそもローマ陶器工業は如何なる成立と展開の過程を辿ったのか。

既に前3世紀後半—2世紀初のプラウトゥス(T. Maccius Plautus)に、>rota figularis<(ロクロ形成陶器)の語⁽¹⁾が見られ、事実同時期のもとと見做される9事例が何れもラテン銘文をもつ⁽²⁾など、共和政中期における陶器生産の事実だけは確かである⁽³⁾。しかし史料事情の然らしめる所として、この時期の生産事情は明らかにし得ない。イタリアで奴隷制大土地所有が漸く端緒に就いたばかりのこの時期に、陶器生産がなお小規模な域を出なかったのは間違いない⁽⁴⁾。

これに対して共和政末期以降に至って、『アレティウム陶器』*vasa Arretina*の語にわれわれは頻繁に遭遇することになる⁽⁵⁾。これは一般に>テラ・シギルラータ<*terra-sigillata*として知られた赤釉浮彫陶器であり、「アレティウムもの」の総称が暗示した如く、生産中心地はアレティウムにあった。プリーニウス(大)(C. Secundus Plinius)はこれと並んで、当時のイタリア陶器生産地としてスレントウム(Surrentum)、ハスタ(Hasta)、ポルレンティア(Pollentia)、ムティナ(Mutina)を挙げ⁽⁶⁾、さらにプテオリ(Puteoli)、クーマエ(Cumae)とホルタ(Horta)をもまたつけ加えた⁽⁷⁾。これらで生産されたシギルラータもまた同様に>*vasa Arretina*<の名で呼ばれており⁽⁸⁾、この一般的な総称からして、地中海市場の至る所にテラ・シギルラータ——以下煩雑さを避けるべく>T.-S.<乃至さらに簡略化した>S.<と略記する——を送り込んだトスカナ地方の現アレッツォ(Arezzo)が生産の一大中心地であったことを知るの容易である。

それ故私的大規模「工業」の主要検討をここに設定し、その展開と終焉の実相を介してローマ工業における奴隷制の一側面に光を当てる。

第一節 アレティウム=シギルラータ生産の成立と展開

『キスアルピナ=ガリア社会経済史』(1941)⁽⁹⁾によると、北イタリアのこの地方で最も多くの事例が発見された陶器銘として、《GELL》,《L・GELLI》=*L. Gelli (us)*;《C・MVRRR》=*C. Murr (ius)*乃至*Murr (us)*なる名の製造主が挙げられており、その事例数からして両者には、かなりの規模の生産が推測されているが経営形態にまでは及んでいない。

他方、H. グムメルス(Gummerus)は、アレティウム起源の銘文例を中心とした事例収集に

よって、製造主=奴隷主とその下に同様に名を残した奴隷の数を次の如く集計した⁽¹⁰⁾。私的工業の奴隷労働規模に関する研究としては、注目すべき作業であった。

製造主名	奴隷数		
[Arretium]		C. Volusenus	11
P. Cornelius	58	L. Annius	10
L. Rasinius Pisanus	44	C. Cispius	8
C. Annius	33	A. Vibius Scrofa	7
L. Titius	26	M. Mammeius	7
(?) . Publi (<i>us vel -cius</i>)	23	L. Iegidius	7
M. Perennius Tigranus	23		
(?) . Calidius Strigo	21	[Puteoli]	
C. Titius Nepos	20	N. Naevius Hilarus	13
L. Umbricius Scaurus	20		
L. Sauforius Gausa	17	[アトリエ所在地不詳]	
L. Tettius	14	C. Rullius	9
C. Memmius	13		
A. Sestius (<i>Pila?</i>)	12	[Arretium 以外]	
(A. vel L.) Avilius	12	L. Valerius	12
C. Tellius	11	L. Nonnius	7

しかし、この数字が果たしてどの程度の信憑性をもつかは疑問である。

第一に、ノーメン (nomen gentilicum) とコグノーメン (cognomen) が語尾省略形式で記入 (押捺) された場合——例えば《P・CORN・POT》の場合、P. Corn (*elii*) Pot (*us*) が意味されたとすれば、P. Cornelius 所有の「奴隷」Potus (の製品) が、もし P. Corn (*elius*) Pot (*us*) が表示されたとすれば、「自由身分」であったことになる——には、しばしば自由と不自由両身分の識別が当該銘文だけでは困難なこと、

第二に、奴隷主の氏族名 (ノーメン) が同一であったとしても、個人名を表示するプラエノーメン (praenomen) が欠落している事例——例えば《AVCTVS ANNI》= (?.) *Auctus Anni* () ——では、主格形の *Auctus* が「奴隷名」を表示したのは確か (*Auctus [fecit]*) だとしても、Lucius Annius, Sextus Annius の何れであったか、所有主が特定出来ない如く、銘文だけでは特定作業が事実上不可能な場合が頻繁なこと、

第三に、グムメルス自身もまた承認する如く、これらの奴隷が縦えば同一ノーメンの所有主に属したとしても、果たして同一人であったか否か、特定が不可能な場合には、同一存在であった

と見做すには不確定要素が多いこと⁽¹¹⁾、

第四に、これが差当り最も重要なのだが、上掲の集計における所有主毎の所有奴隷総数が果たして奴隷であったか否か、その処理には慎重な手続きが要求されること、

しばしば阻止的に作用する以上の問題諸点を前にして、検討のさらなる進展を図るためには、なによりも先ず、「奴隷主」乃至「アトリエ主」と並んで>T.-S.<にその名を残した「奴隷」(乃至しばしば「解放奴隷」もまた)は、如何なる存在であったか、敢えて自己の名を押捺したことの意味が問われねばならないが、先ず以て次の事実に着目する必要がある。

即ち、>T.-S.<にその名を押捺した奴隷が、例えば、

《PANTAGATVS RAS・MEMI・FE・》

の如く、しばしば“FE (*cit*)”(乃至“MA (*nu*)”)の語を伴っていることである⁽¹²⁾。

ここから容易に推察されるのは、他ならぬ「商品」(而も「私的」な)にその名を銘記した「主格」乃至「属格」の奴隷が、当該製品を「(当人)の手」によって「作った」かまたは生産に何らかの重要な役割を果たしたことである。T. フランク (Frank) は、自己の名を押印したスタンブ銘の奴隷を、当該>T.-S.<の「デザイナー」と見做し、Corneliusは「約40」、Strigoは「少なくとも約20人」の奴隷デザイナーを擁していた、と言い、さらに各デザイナー夫々はその下に「数名の陶工 (potters) と窯方 (furnacemen)」の奴隷を擁していた、とした⁽¹³⁾。何れにしてもその下に一般労働の奴隷群(間違いなしに「未熟連労働」の)を擁した「生産指揮奴隷」であった。勿論その名を押捺した奴隷(及び解放奴隷)一般を全て生産指揮のデザイナーとしてのみ見做し得るか否かには問題が残るが、少なくとも本来法的には『手中物』として「所有」の対象にすぎなかった奴隷が、アトリエ主=奴隷主ではなくして、「生産者」として他ならぬ私的「商品」にまでその名を印したという事実それ自体を以てしても、かれらが労働奴隷一般とは異なった存在であったのは間違いない⁽¹⁴⁾。

もしそうだとすれば、現実の奴隷数は上掲数の5～6倍であった計算になる。これらが必ずしも同一時期ではなかった可能性を考慮に入れるとしても、少なくとも計算上は銘文を残した当該奴隷自身を加えた>1生産単位<は、精々の所その「2～3倍」の比較的小規模な生産組織であった。従って上掲の集計に明らかなのは、アレティウムでは全体として「数10名、時として100名を越す奴隷群」をもつ『大規模工業』が存立したことである。

大々的な集団労働の鉱山と採石⁽¹⁵⁾は別にして、総じてローマの私的〈工業〉が大規模化し得なかった周知の事情については、改めて言及の必要はなからう⁽¹⁶⁾。しかるに>T.-S.<の生産は、奴隷数100名近い、または時としてそれを超す規模にまで拡大した。それを可能ならしめた事情は何であったか。T. フランク (Frank)⁽¹⁷⁾は、アレティウムで>T.-S.<『工業』が「例外的」にまで「発展」し得た理由として、

- (1) 陶土の調達に必要であった「企業秘密」らしきもの (quasi-trade-secret)、
- (2) (一般の未熟連労働奴隷)とは異なって、「某かの技能」をもつ「熟練デザイナー」が要求され、

その故に「競争は起こり得なかった」こと、

の両要因を挙げているが、多分に近代的価値観の投影とも思しき憶測の域を出るものではなかった。何れにせよ、目下の筆者にはそれを直接伝えた古典報告は見当らず、さらに論議を進めるためには、別方向からの模索が必要であろう。

検討すべき課題の一つは、イタリア産一般、とりわけアレティウム産 >T.-S.< の「市場性」である。

アレティウムを起源とした陶器が、黒陶の段階で既に、首都ローマのみならず少数事例ながらヒスパーニア市場にさえ送り出されていたことが明らかにされているが⁽¹⁸⁾、本稿は問題の本質からしてそこまで遡る必要はない。これに対して同アレティウムを中心に、生産が赤釉の >T.-S.< 段階に及ぶや、その流通の痕跡は急速にイタリアのみならず殆ど全西部地中海世界のいたる地で大量に発見されるに至った。赤釉光沢度・浮き彫り主題・陶器形状等々の個別検証を欠いて純粋に押捺銘文だけに限って見ても、例えば《DIAMED//VIBI》(C. XI, 6700, 769a), 《EPICRV//A・VIBI》(C. XV, 5753) 等々の奴隷主銘及びヴァリエーション銘の他、《A・VIBI》=A. *Vibi* (i) の一銘文例に関して、“CIL”『ラテン金石文集成』に拠る筆者の極めて目の粗い検索作業だけでも既に、その分布は広範囲に及んだ(II, 49, 65; III, 12014, 152 ;IX, 6082, 86; X, 8056, 372; XI, 6700, 765a-b; XIII, 10009, 280; XV, 5750)。しかしこれらの逐次例証はかえって非生産的であり、既に確証済みの諸事実に関しては、その概略を紹介するだけに止める。なお以下の引用銘文中に示された“//”は、筆者が便宜的に使用した改行箇所を意味する。

『地中海東部』

『博物誌』は、当時高品質の >S.< が、サモス(Samos)で多量に生産されていたことを誌すが⁽¹⁹⁾、その他アジア産の >S.<⁽²⁰⁾ もまた加わって、総じてこの地でのアレティウム産の発見事例は西部地中海諸地方に比してさほど多くない。しかしそれでもなお、事例は比較的豊富にエペソス、パレスティナ、キプロス、エジプト、アッティカのみに止まらず、南部ロシアにまで流通痕跡を残したばかりか⁽²¹⁾、遙か遠くインドにさえ及んだ⁽²²⁾。

『地中海西部』

帝国西・北部諸属領、就中ヒスパーニア、ガリア、ブリタニア、ゲルマーニア、パンノーニア、中でも前二者では、アレティウムばかりかプテオリ産の >T.-S.< もまた最も集中的に大量に知られる⁽²³⁾。一方北イタリアの生産が特定された、Aco, Norbanus, Sari 銘の >S.< は、ガリア、ゲルマーニアからさらにドーナウ流域に、Arrius 銘は北イタリアを中心にダルマティアにまで及んだが、これらは何れも分布密度と数量の両者に於いてアレティウム =>T.-S.< には比肩し得なかった⁽²⁴⁾。

これらの流通痕跡——勿論「個人的」か乃至は「軍団兵士」による(私的利用のための)直接的な持ち込みも多分に推測⁽²⁵⁾ されるために、事例の悉くを〈流通〉の痕跡とは見做し難いが、少なくとも私の商品として製造主の窯場を離れたことだけは確かである——は、ローマ世界に

於ける『アレティウムもの』に対する高需要度⁽²⁶⁾の直截的な表現であった。このことが、すぐれて内都市的な工房の枠内に終始することなく、遺構調査とスタンプ銘の数量から推して紛れもなく製造所的規模で、多数の熟練及び未熟練の奴隷に対する需要を促した一因になったことは間違いない。

もしそうだとすると、アレティウムに於ける>T.-S.<の生産がこのような広域市場を前提として「商品生産の方向性と規模」を打ち出したとすれば、どの時点からであったか。次いで「市場からの後退と生産それ自体の萎縮」が看取されたのは何時頃からであったか。イタリア工業部門に於ける大規模奴隷制の成立・展開・衰微のプロセスが課題となる。それ自体の処理困難な大問題の本質からしてもまた、厳密さは期され難く、差当りここでは先行諸学説のごく大まかな整理によって、何らかの目安が得られることで充分である。

H. グムメルス (Gummerus) は生産活動の最盛期を、「50 B. C. ~ A. D. 50」の約1世紀間に設定し、H. コムフォート (Comfort) は、イタリア製陶遺構の考古学知見を手懸かりにして、>T.-S.<の成立を「紀元前100年頃」に推定した先行学説は「早過ぎ」として疑問視し、アレツォは無模様黒陶の生産中心地ではあったが、>T.-S.<の生産開始時期は「帝政の成立以前にそれほど遡らない」、として時期特定に幅を持たせた。一方、R. J. チャールストン (Charleston) によれば、赤釉光沢陶器の技術 (red-gloss technique) と鑄型 (impressed moulds) を使用した生産は既に早くも「前2世紀」には東部地中海に知られ、「この両技術から芽生えた」アレティウム赤釉陶器の大々的な生産——黒釉から赤釉への「移行」は「B. C. 25頃迄に完成した」——は、「30 B. C. ~ A. D. 30」の極めて短期間のうちに「急激な成立と枯死」を体験した。これより先 T. フランクは A. オクゼ (Oxé) 説を踏襲して、生産開始の時期を「ほぼ30 B. C. 頃」に設定した後、この工業は「紀元後1世紀迄は生き延びなかった」と見做した。W. L. ウェスターマン (Westerman) もまた、『奴隷制』叙述の中で同様に「25 B. C. ~ A. D. 25」の1世紀間を当てた。従って多少の食違いはあるが、極大まかに見て「B. C. 1世紀後半 ~ A. D. 1世紀前半」の約1世紀間に、大々的な奴隷労働に依拠したアレティウム = >T.-S.<工業の展開・帰結の全プロセスを当てることで共通した⁽²⁷⁾。

専ら考古学的知見に拠る以上の諸学説に加えて、銘研究もまた看過され得ない。イタリアの他、西部諸属領の広範囲に亘って発見される最早期製造主銘の一人、「M. Perennius の〈奴隷〉 Cerdo」は、当該銘、《Cerdo M. Perenni》(C. XI, 6700, 437a) の他、Heracles Musarum 神奉献の銘文(ギリシャ・ラテン両語)をもつ大杯にもまた銘を残した。C. XI, 6700, 437b に収録された銘文がそれであり、神殿再建そのものは「29 B. C.」であった⁽²⁸⁾。この大杯奉献が何時であったか、定かには出来ないが、恐らくそれほど後ではなかったとみて間違いないであろう。

M. Perennii の内、最も注目されるべきは、アレツォの窯遺構調査によって生産の跡が確認され、大量のスタンプ銘を各所に残した M. Perennius Tigranus (C. XI, 6700, 459; XIII, 10009, 191; XV, 5423) は、既に先行諸学説で共通理解として止まる如く、「アルメニア王」と同一名のコグノメーメン = <Tigranus> から推して、赤釉浮彫陶器の技法を持ち込んだ東方出身の「奴隷」⁽²⁹⁾、

次いで M. Perennius の下で自由を得た後、「解放奴隸」“M. Perennius Tigranus” の名で——だがしかししばしば “Tigrani” だけのコグノーメン単独銘でもまた (C. XV, 5646a-b et al.)——奴隸主乃至製造主として生産痕跡を残した⁽³⁰⁾。

窯場遺構の周辺に散乱する >T.-S.< の破片に残る押印銘から、M. Perennius を継承したかれの解放奴隸 = M. Perennius Tigranus に関して確証が得られたのは次の両事実であった。

- (1) ‘Bargate M Peren’ (C. XI, 6700, 451a) , ‘Bargate/M. Tigr’ (id. l) 等々、最初は M. Perennius Tigranus の「奴隸」として痕跡を残した Bargates は、《M. Peren (n) ii//Bargati》(C. XV, 542) , 《MP^(sic).eren//Bargati》(C. XI, 6700, 451i) に拠って自由身分として現れ、今や「元主人」Tigranus に代わって窯主・奴隸主としてその名を残した。今日の編年では、「A. D. 20 年頃」のことだと推定される。
- (2) アトリエはその後、M. Perennius Bargates からかれの「元奴隸」、「Saturnius」と ‘Crescens’ の手に移り、「A. D. 40 年頃」迄生産が継続された後、稼働痕跡は完全に消え去った。以後 ‘M. Perenni’ 押捺のスタンプはもはや現れない⁽³¹⁾。

P. Cornelius には、最大多数の奴隸が算えられたが、アルノ川沿いに現アレッツォから約 10 キロ離れた地点で発見されたかれの窯遺構に生産痕跡を残した奴隸のひとり ‘Rodo’ には、《RODO》に《AVGVSTVS》(C. XI, 6700, 247a) が並記された事例が知られた。当該銘文を収録した E. ボルマン (Bormann) の註記では、「アウグストゥス期」(C. XI, 6700, 247a: ‘ad Augusti aetatem’) と見做されており、P. Cornelius の時期推定 (但し終焉は不明) に一つの手懸かりを提供しよう⁽³²⁾。同様に、《Apollo//C. Anni》(C. XI, 6700, 33) , 《Eros//C. Ann》(id. 44; C. X, 8055, 137; C. XV, 4969) ; 《C. Memm (ii)》(C. X, 8055, 26; VI, 6700, 378; XV, 5331) , 《Eraxs^(sic) // Memmi》(C. XI, 6700, 380) ; 《L. Rasini Pisani》(C. XV, 5496a-l; X, 8055, 36; XI, 6700, 519; XIII, 10009, 199) , 《Aesc (i) n (us) //Rasini》(C. XV, 5498) , 《Bospor (anus) //Rasini》(C. II, 4970, 89; IX, 6082, 17; XI, 6700, 522; XV, 5499) 等々に奴隸主として現れる C. Annius, C. Memmius, L. Rasinus もまた、殆ど時期を同じくして「A. D. 40 ~ 60」に属した⁽³³⁾。

次いで注目すべきは、>T.-S.< に主格乃至属格形でその名を押捺した奴隸には、ギリシャ系または東方系の『コグノーメン』が極めて多いことである。M. Perennius Tigranus の如く自由の獲得後、奴隸主・アトリエ主として現れる場合であれ、L. Tettius Caruto の如く自由身分の労働力 (C. XIII, 10009, 252; XV, 5637) としてとどまった場合であれそうであり、明らかに奴隸時の呼称をコグノーメンとした自由人もまた少なくはなかった (イタリック筆者)。これに反して、奴隸主・アトリエ主として現れる『ノーメン』(氏族名) の多くはラテン系名でしめられた⁽³⁴⁾。勿論、《C・T N》(C. XI, 6700, 692; IX, 6082, 31) のようにしばしばディヴェロップに困難を伴う「押印銘」としての銘文の性格上、人物特定に正確が期され難い場合が多いとは雖も、コグノーメンそれ自体に限って言えば、その多くが「ギリシャ系」乃至「東方系」で占められた事実そのものは承認され得る。

アレティウムを初めとするイタリア＝>T.-S.<工業の成立と展開に、地中海東部からの「技術的」にと同時に「人的」な移動⁽³⁵⁾を見ることが出来よう。

それは何時であったか。>T.-S.<研究における編年概略の整理によって、一応の目安が得られることで差当り充分である。

R. J. チャールストンの『ローマ陶器』に拠れば、前1世紀前半、アレツオの黒陶がギリシャ系の奴隷銘文を持つ所から、イタリアの製陶工業はこの段階でルークルス(Lucullus)・ポンペーユス(Pompejus)の『東方遠征』で獲得された>T.-S.<技術の「熟練陶工」(skilled potters)を(奴隷として)吸収しはじめていた、と推測され、決定的には『アクティウムの勝利』によって、経済的中心もまた「東から西に移動した」、と結論づけられた⁽³⁶⁾。焼成技術・窯構造を初め黒陶から>T.-S.<への技術的变化それ自体には到底立ち入り不能だが、少なくとも大々の奴隷労働依拠のアレティウム＝>T.-S.<の生産が、『パックス・アウグスタ』の到来と略々時を同じくして実現されたのは間違いない。

地中海市場からの「終焉」に関してもまた特定年を当て得ないのは言うまでもない。歴大な残存事例によって多数の奴隷労働によったことが今や明白なアレティウム＝>T.-S.<の市場支配は、しかしそれにも拘らず決して永続的ではなかった。既に早くも「1世紀末頃」には市場からの激減と事実上の消滅が現れ始めたからである。而もこの事実と裏腹に〈アレティウムもの〉一般の総体的に顕著なデザインの「没個性化」と製品仕上げの「粗雑化」のさらなる進行⁽³⁷⁾を伴っていた。従って『パックス・ローマーナ』の到来とあい前後して、広域市場を前提として高度に芸術性を顕わにした「奴隷制商品生産規模の拡大化」を実現しながら、その実早くも紀元後1世紀末頃には、急速に地中海世界市場からの後退が招来された。

もし然りとすれば、アレティウム陶器工業に急激な衰退と消滅を辿らしめたのは、如何なる事情によったか。さらに新たな課題である。

第二節 経済的背景

ここで先ず注目すべきは、イタリアにおけるガラス工業の展開である。この生産技術もまた地中海東部、とりわけシドン・アレクサンドリアから移入された「透明ガラスと吹矢(blow-pipe)の発明」が、范への吹き込みによる「大量生産」とそれに伴う製品の低廉化を促したのは周知の事実⁽³⁸⁾であり、これがアレティウム＝>T.-S.<工業の不振を招いた⁽³⁹⁾一因になったかもしれない。しかし、アレティウム＝>T.-S.<が西部諸属領市場では殆ど完全に流通痕跡を消した⁽⁴⁰⁾のに対して、他ならぬ北アフリカではなおそれを残した⁽⁴¹⁾。そればかりか、後述の如く1世紀第二・四半世紀以降、『南部ガリア産＝>T.-S.<』の大々的な生産開始と流通に続いて、中部ガリアから東部ガリアへの「生産の拡散化」が顕著な事実として浮上する。アレティウム＝>T.-S.<の事実上の「市場喪失の後」に初めてであり、結果と原因の取り違えが指摘されねばならない。

アレティウム=>T.-S.<の地中海市場からの後退に示唆的であったのは、ガリア南部における生産開始と地中海市場への進出であった。

陶器を入れた未開封の梱包二個がポムペーイで発見された⁽⁴²⁾。恐らく埋没(A. D. 79)の直前に到着し、なお荷解きの前であったと思われるが⁽⁴³⁾、その中に入れられていた全90個の内、半数以上が疑いもなく『南部ガリア』の陶工スタンプ押印を持った。H. ドラゲンドルフ(Dragendorff)の銘収録(1895年)⁽⁴⁴⁾では、次の事例がそれであった。(括弧内の数字は事例数)

ALBIM; OF BASSI CO; CARVCATI; GERMANI; GERMANI OF; MANDVIM; OF MOMM (22); OF MOMMO (2); MOMMONIS; OF PATRICI; PAVLLVS; OF RVFINI (2); SABINVS (2); SABINVS F (3); SASMONOS; OF SECVN; OF SILVANI; VIRT; OF VITA (4).

これらの内、ロットヴァイル(Rottweil: Arae Flaviae)のローマ遺構で確認されたのは、R. クノル(Knorr)の収録⁽⁴⁵⁾によれば、次の諸例であった

GERMANI OF (6); GERMANI F; GERMANI F SER; PAVLLI; OF RVFINI (3); OF SECVND; OF SILVANI; OF VIRTVTIS; OF VITA.

これらは形状と光沢及び粘土組成からして、間違いなしに南部ガリアで生産されたものであり、しばしば同一のスタンプを使用したばかりか、浮彫りモチーフもまた明らかに同一の范を利用したと思しき形跡もまた認められる。もはや偶然とは言い得ないこれら諸例の現れ方を以てすれば、1世紀後半、南部ガリア産の>T.-S.<がドイツ南部のロットヴァイルと同時にポムペーイにさえ規則的な市場を見出していた事実にもはや疑問の余地はない。この事実に拠って、R. J. チャールストンは、他ならぬイタリア市場においてさえ「この時期迄に」既に南部ガリア産がアレティウム=>T.-S.<を凌駕していた、と見做した⁽⁴⁶⁾。

ここに暗示された西部諸属領における『ローマ化』の進行、即ち「産業の遠心化」(decentralization of industry)及びそれに伴う「市場競争」学説そのものへの直接的な立ち入りは一先ず別にして、少なくともこの両事実は、1世紀70年代末迄の間に南部ガリアの陶工がその名を押捺した>T.-S.<がポムペーイのみならず遙か遠距離のゲルマーニアの地にさえ、「商品市場」を見出していたことの直接的証言であった。

ガリア南部に於ける>T.-S.<工業の成立と展開に関して、T. フランクはその理由の一つとして、アレティウムのそれがこの地に「支工場群」(branch factories)を設置したことを挙げる⁽⁴⁷⁾。「古代世界」が最後まで解決できなかった技術的諸制約、とりわけ輓具の不備とそれに伴う長距離陸路輸送の諸制約が作用したことは否めない。もしそうだとすればこの現実、ガリア南部で進行した『ローマ化』の顕著な経済的実態の一徴表であった、と見做され得るかもしれない。だがしかし管見の及ぶ所では、〈アレティウム→ガリア南部〉への陶工(並びに工房)の直接的な移動が明らかなのは、*Cn. Ateius*の僅かに一例が挙げられるだけでしかない⁽⁴⁸⁾。地中海世界の経済的展開に直接連なるだけに、陶工自身の移動、将又アレティウムからの范の持ち込み、乃至アレティ

ウム＝>T.-S.<の模倣かまたは直接的な型どりによる范作成等々を踏まえた事例のさらなる積み上げが急務の課題となろう。しかしそれはそれとして、諸学説の整理を介して差当たり安全に言えたのは、次の顕著な事実であった。

陶工の「移動」現象そのものは、他ならぬイタリア内でもまた頻繁であった。ピサを起源とした>T.-S.<にスタンプ銘を残した Sex. Mu (*trius*) Pi (*sanus*), L. Rasinius Pisanus は、恐らくアレティウムに窯場跡を残した *Murrii, Rasinii* の一人であり、同様に>T.-S.<の生産で知られた北イタリアのアーキレイア (Aquileia) では、スタンプ銘を残した陶工の約半数にアレティウムとの関係が推測された⁽⁴⁹⁾。アレティウムから北イタリア、就中パドゥス (Padus: m. Po) 地域への陶工と製陶技術の進出は、考古学的諸知見によって確証が得られた所であり⁽⁵⁰⁾、この〈アレティウム→ピサ、アーキレイア〉への>T.-S.<生産の拡散＝「遠心化」の直接延長線上に、〈アレティウム→ガリア南部〉へのそれ⁽⁵¹⁾、次いで(到底本稿では処理出来ない)中部ガリア→東部ガリアへの移動と生産の拡散化が惹起されたことは確かであろう⁽⁵²⁾。ここで確認され得たのは、しばしば人的な移動を伴った、技術的かつ経済的・文化的な「遠心化」の形で進行した『ローマ化』の一現実であった。

南部ガリア＝>T.-S.<の年代特定は、古典諸史料の致命的ともいえる欠如の故に、専ら陶工スタンプ、及びシギルラータ＝モチーフを中心として遺構調査と製品断片の化学的分析に拠ってのみしか図られ得ないのだが、それらを手懸りとして先ず第一に、南部ガリアに於ける中心的生産地として確証されたのは、ガロンヌ上流域のモンタン (Montans)、ラ＝グローフザンク (La Graufesenque)、バナサク (Banassac) を中心とする窯場群であった⁽⁵³⁾。H. ドラゲンドルフの先駆的研究 (1895) 以来、情報量の急増と分析の精緻化を踏まえた陶工別編年は、J. デシュレット (Déchelette, 1904)⁽⁵⁴⁾、R. クノル (Knorr, 1912, 1919 et al.)⁽⁵⁵⁾ らによって、一応の集大成が図られた。それに拠ると、略々大まかなクロノロジーは次の如く要約できる。(但し煩雑さを避けるために、3 中心地別の陶工銘の洗い出しと全 153 種のスタンプ例に及ぶ各陶工銘毎の編年作業⁽⁵⁶⁾は省略する。)

- (1) 南部ガリア＝>T.-S.<のゲルマーニアへの到着初出例は、ホーフハイム (Hofheim) が「a. 40 以後」(以下“a.”は〈A. D.〉の略記)、ヴィースバーデン (Wiesbaden) ではやや遅く「a. 69 以前」、ネッカー (Neckar) 上流のロットヴァイルは「a. 74 以後」であった。
- (2) 南部ガリア＝>T.-S.<は、総じて言えば、略々「a. 20～115」の間に「ゲルマーニアに引渡され」、この内「最早期例」をなしたのは「1 世紀 20 年代」に生産を開始したモンタンの陶工であり、南部ガリア＝>T.-S.<陶工の個別生産年代は「a. 25」の 5 スタンプ (*ALBINI, BALBVS・F, OFIC・BILICATI, MACCARI, VAPVSO*) を最古にして、最大多数は以後の「クラウディウス～ウェスパシアヌス諸皇帝期間」に属した⁽⁵⁷⁾。

その後さらに H. コムフォート (Comfort) は情報量の急増を踏まえて、モンタンで知られ得る製造年(陶工数 59 名)は、「a. 15～90 乃至それ以後」、同様に、ラ＝グローフザンク (陶工数 246 名)

のそれは「a. 25/30～トラヤーヌス治世期」、バナサク(陶工数15名)の活動時期は「a. 30～100」の時期推定を得た⁽⁵⁸⁾。

>T.-S.<のこのようなクロノロジーそれ自体は、その本質からして製造年・送込み年の絶対的な基準を提供するものでは決してなくして、かなりの幅を持たせねばならないことは言うまでもない。しかし、専ら諸学説の結果だけを要約したにも関わらず、南部ガリアに於ける>T.-S.<の成立と展開の時期に関してある程度の実態は知られ得られた。

「流通」を前提とした>T.-S.<の生産は、それ故総じて言えば、(R. クノルによる各スタンプ毎の時期推定作業が明らかにした如く)南部ガリアに於ては「a. 25/30年頃」に至って、それ迄の散在形態から〈集团的〉に開始され、「50年代」に入って急激な拡大化を体験した、と見做され得る。ここからアレティウム＝シギルラータの西部市場からの急激な「後退」と南部ガリア＝シギルラータの生産・流通痕跡の急激な「拡大」は、一見して時期的な重なりを示したかに見える。1世紀の20年代に軍団砦が放棄されたハルテルン(Halterne)にはなお、南部ガリア起源の>T.-S.<は発見されず、ホーフハイム(Hofheim)とアイスリンゲン(Aislingen)に初めて痕跡を残した。特に前者での出現は「a. 40年代」に南部ガリア＝>T.-S.<がゲルマーニアの地に到着していたことを示し⁽⁵⁹⁾、さらに前掲の如くロットヴァイルでは、「70年代」であった。従ってアレティウム、プテオリ＝シギルラータが、かつて排他的に市場支配を実現していた帝国西部諸属領、とりわけガリア・ゲルマーニア市場からの後退と消滅を体験したのに対して、ガロンヌ上流域の南部ガリア＝シギルラータが結果的にではあれ、それに取って代る形で「商品生産」の拡大化をしめした事実からして⁽⁶⁰⁾、『パックス・アウグスタ』下に招来されたイタリアの経済的支配が、ガリアに於ては疑いもなく「ローマ化」の進行と相俟って、既に早くも「1世紀20/30年代」に入って、市場からの後退を露にしつつ、その力を喪失し始めたことの一徴表を読み取ることが出来るかもしれない。

否そればかりか今度は、南部ガリアからルズー(Lezoux)を中心とする中部ガリア、次いで東部ガリアへの>T.-S.<生産の拡散化⁽⁶¹⁾が見られることになるが、もはや別課題である。

おわりに——帰結と展望——

専ら考古学的知見と銘文に依拠せざるを得ない問題の性格上、最後まで隔靴搔痒の感は否めず、不十分な点が多々残されたのは百も承知だが、先行諸学説の整理を中心にした以上の検討によって、少なくとも最低限確かなものとして残ったのは次の諸点であった。

- (1) イタリアに於ける赤釉浮彫のテラ・シギルラータ工業は、特にエトルーリア都市アレティウムで、紀元前1世紀の後半以後、疑いもなくアルヌス河(Arnus: m. Arno)を最主要流通路として、純然たる私的営利としては他に類を見ない多数の奴隷労働を擁した、ローマ最大規模の「工業」の一つとして成立、展開した。

(2) 主格乃至属格形人名によって克明に当該 >T.-S.<への関わり——「製造主」＝アトリエ主名及び「直接生産者」＝奴隷乃至解放奴隷名——を直截的に表示したスタンプ銘に拠っただけでも既に明らかな如く、流通の跡はイタリア・帝国西部諸属領を中心に『ローマ世界』の略々全域に及んだばかりか、遥かにそれを越えた遠距離の地にもまた足跡を残した。CIL. に収録された自由・不自由身分の陶工名を中心とした筆者の限られた渉猟結果だけからしてもまた、その数は膨大であり、分布もまた広範囲に及んだ。

(3) しかしそれにも拘らず、

(a) プテオリ、クマエ、ムティナ等々、その他イタリア諸都市に於けると同様に >T.-S.<工業の展開＝「イタリア内生産の拡散化」、

(b) 次いで帝国西部、とりわけ南部ガリアを起点として、さらにガリアから東部ガリアに及ぶ生産中心地の移動＝「属領内生産の拡散化」、

の両事情と相俟って、『アレティウムもの』*vasa Arretina* の総称で知られたアレティウム＝テラ・シギルラータは、「紀元後1世紀の第二・四半世紀頃」を境にして、西部諸属領から流通痕跡の大幅な後退を顕にし始めた。

(4) 従ってアレティウム＝テラ・シギルラータのアトリエが、広域大市場を前提としてその繁栄を享受したのは、精々の所、『パックス・アウグスタ』を挟む「紀元前1世紀後半～後1世紀前半」の約1世紀間でしかなかった。

アレティウムに於て浮彫りの赤釉技術と芸術性を主張する >T.-S.<「工業」は、最早期製造主の一人、M. Perennius Tigranus が不自由身分出身であり、それを継いだ M. Perennius Bargates がかつては前者の「奴隷」として生産関与の足跡を残した如く、最初から東部地中海出身の奴隷労働と製造主の両者に支えられ、正にその故に広域大市場を前提として急激な拡大化を実現した。それを最も直接的に証言する物証の一つが、現アレツツオ市内を中心にして数箇所にわたって残る生産遺構群⁽⁶²⁾であった。そこで明らかにされたのは、最後まで組織的な分業化による工場的規模での生産を許すことなく、複数場所に及ぶ(而もその一箇所自体が)複数小規模生産施設の複合によってのみ大規模化が実現され得たことであった。これに今一つのモメントが加わった。同一のスタンプ銘と連続浮彫モチーフをもつ大量の複数事例群がそれであり、そのことに示唆されたのは、生産に高度の芸術性と仕上げに至る高技術度が要求されるが、一旦母型＝〈范〉が与えられれば、それに拠って未熟練労働の奴隷にも容易に量産化、同時にまた、完成品の〈型どり〉による複製化——このため正確を期すには、今日個別検討が重ねられつつあるようなサイズの測定と同時に最有効手段として焼成温度の測定と粘土組成の定量分析が最有力手段となる——の量産化のメカニズムであった。

だがしかし、先になされた展望をいま一度繰り返すと、地中海規模でのアレティウム＝>T.-S.<の『市場支配』は精々の所1世紀間しか続かなかった。そこに明らかになったのは、市場そのものの脆弱性であった。他のイタリア諸都市の散在的な生産、次いで決定的とも目された南・中部

ガリアに於ける大中心地が形成され、その市場進出が顕著となったからである。少なくとも現象的には、これが『アレティウムもの』の急激な市場後退の一背景をなしたことは否めない。だがしかし、果たして現実はそうであったのか。今日なお散見される「市場競争」理論では必ずしも十分に処理出来ない、古代経済のさらに新たな本質的問題の発生に連なるからである。そのためには奴隷制のそれを初めとする生産の構造的分析が待たねばならないが、差当り本稿ではローマ奴隷制に関する問題抽出のための一作業として、その経済的背景を探るべく、アレティウム＝>T.-S.<の成立・展開が最も象徴的に示した生産の拡大化を取り上げ、その実態を専ら「現象面」から処理することに終始した。

[註]

- (1) Plautus, *Epidicus*, 371.
- (2) Marquardt, J., *Das Privatleben der Römer* II (Leipzig 1882), 638. この内、《SAITVRNI》が銘記された1例は壺、8例は平皿であった。
- (3) この時期の黒陶生産地として、カムパーニアのカレース (Cales) が知られた。Frank, T., *An Econ. Surv. of Anc. Rome* I (Baltimore 1933), 51; Charleston, R. J., *Roman Pottery* (London 1955), 10.
- (4) Frank, T., *An Econ. Hist. of Rome* (Baltimore 1927²), 109; Charleston, R. J., *loc. cit.*
- (5) E. g., Mart. I, 53, 5; 24, 98; Plin. *N. H.* XXXV, 160; Isid. *Orig.* XX, 4, 5: ‘Arretina vasa ex Arretio municipio Italiae dicuntur, ubi fiunt....’
- (6) Plin. *N. H.* XXXV, 160.
- (7) Plin. *N. H.* III, 32. これらの内、プリーニウスの叙述に拘らず、管見の及ぶ所スレントゥム、ハスタ、ポレンティア産の>T.-S.<はなお未発見である。Vgl. Comfort, H., ‘Terra Sigillata’, *RE. Suppl. Bd. VII* (Stuttgart 1950), 1316; Charleston, R. J., *op. cit.* 16. 一方北イタリアのムティナと南イタリアのプテオリ両者 (特に後者) は、比較的豊富な生産と流通の痕跡を残した。前者の>T.-S.<は、イタリア各地の他帝国北部 (Raetia, Noricum, Pannonia, Germania) に知られるが、ウェスパシアヌス期には既に姿を消していた。Comfort, H., *RE. cit.* 1316; Gummerus, H., ‘Industrie und Handel’, *RE. IX* (Stuttgart 1916), 1469; Charleston, R. J., *loc. cit.* 南部イタリアの港湾都市・プテオリの>T.-S.<は帝国各地で広く発見されるが、R. J. チャールストンによれば、この中には明らかにアレティウムの ‘M. Perennius’ = >T.-S.<と全く同一デザインの浮彫模様をもつ複製事例もあった。Charleston, R. J., *loc. cit.*
- (8) Frank, T., *Econ. Hist.* 220. なお、Cagnat, P. et Chapot, V., *Manuel d’archéologie romaine* II (Paris 1920), 447 によると、赤釉は珪土、酸化鉄、アルカリ性物質の混合によって得られた。
- (9) Chilver, G. E. F., *Cisalpine Gaul: Social and Economic History from 49 B. C. to the Death of Trajan* (Oxford 1941).
- (10) Gummerus, H., *a. a. O.* 1487.
- (11) *Ibid.* 1488. さらに Gummerus は、例えば C. Sentius, C. Murrius の如く、製造主銘のみで奴隷主としてのスタンプを残していない場合もまたあったことを付け加える。
- (12) Cagnat, P. et Chapot, V., *op. cit.* 447.
- (13) Frank, T., *Econ. Hist.* 222.
- (14) かかる奴隷の存在それ自体が、>T.-S.<工業に於ける奴隷制の構造分析に重要な課題を提起することになるが、本稿の主題からして、これ以上の立ち入りは避ける。
- (15) Plin. *N. H.* XXXIII, 27, 78; Strabo, III, 2, 10. Vgl. Hue, O., *Die Bergarbeiter: historische Darstellung der Bergarbeiter* Bd. I (Stuttgart 1919), 43; Orth, ‘Bergbau’, *RE. Suppl. IV* (Stuttgart 1924), 145; Ardaillon, E. ‘Metalla’, Daremberg, Ch.-Saglio, Edm., *Dictionnaire des Antiquités* III-2 (Paris 1926), 1866; Westermann, W. L., ‘Sklaverei’, *RE. Suppl. VI* (Stuttgart 1935), 1032; Id., *The Slave Systems of Greek and Roman*

- Antiquity* (Philadelphia 1955), 72; 94; Burian, J., 'Arbeitsbedingungen und Klassenkampf im römischen Erzbergwerken der Kaiserzeit', *Ztschr. f. Geschichtswiss.* VI (1957), 1204.
- (16) Vgl. z. B., Salvioli, J(G)., *Der Kapitalismus im Altertum* (Stuttgart 1922), 100ff., 145ff.; Rostovtzeff, M., *The Social and Economic History of the Roman Empire* (Oxford 1926), 303; Westermann, W. L., *Slave Systems* cit., 120.
- (17) Frank, T., *Econ. Hist.* cit., 223.
- (18) Gummerus, H., *a. a. O.* 1469.
- (19) Plin. *N. H.* XXXV, 160.
- (20) H. Gummerus (*a. a. O.* 1469) によると、*C. Sentius* はアーシアに「支工場」を所持していた。
- (21) Gummerus, H., *loc. cit.*
- (22) Charlesworth, M. P., 'Roman Trade with India', in: *Studies in Roman Economic and Social History, in Honor of A. Ch. Johnson* (Princeton 1951), 137.
- (23) Gummerus, H., *a. a. O.* 1469; Comfort, H., *a. a. O.* 1317; Charleston, R. J., *op. cit.* 16; Frank, T., *An Economic Survey of Ancient Rome* V (Baltimore 1940), 192. なおプテオリはクラウディウス帝時代まで、イタリアの最主要港の一つとしての地位を保ったが、ここで知られ得る最大規模の>T.-S.<製造主、*Naevius Hilarus*には少なくとも13名の奴隷が知られ、その製品は遠くゲルマーニアの軍団駐屯城砦 (Oberaden) に遺された。当該銘の>T.-S.<は、型研究によれば、アレティウム= >T.-S.< 'M. Perennius Tigranus' の影響を強く受け、そればかりか中には同一の范によったとしか思えない事例もまた多々含まれた。なお、*Naevius Hilarus*にはアウグストゥス期が推定されているが、この事例から推して、アレティウム= >S.<の最早期= M. Perennius Tigranusより遅かったことは疑いない。この他プテオリには、*Q. Ennius Maecius*, *Q. Pompeius Serenus*, *L. Valerius Titus*, *Ceri*(), *Coma*(), *Corithus*, *Epigonus*等々の陶工がスタンプ銘を残したが、何れもアレティウムほどの規模は持ち得なかった。Comfort, H., *loc. cit.*
- (24) Gummerus, H., *a. a. O.* 1470; Comfort, H., *a. a. O.* 1317. *C. Aco*の銘文例はゲルマーニア2箇所 (Oberaden, Aislingen) ——内前者での初出は「前8年以前」であり、後者ではティベリウス時代に見られたが、それ以後の発見例は報告されていない——に知られる。
- (25) >T.-S.<の流通に軍団兵士が重要な役割を演じたこともまた看過すべきでない。H. コムフォート ('*Terra Sigillata*', in: Frank, T., *Econ. Surv.* V, 192) は、アウグストゥス時代のイタリア= >S.<は「買われ、使用され、壊され、破棄され、兵士・市民によってイングランド中部 (Midland) からセレウケイア (Seleuceia) に至るまで取替えられた」、と言い、さらにまたローマ軍団生活での使用例は、ラインラント、ブリタニアの諸砦址に物証が残された。Comfort, H., *RE.* cit. 1321.
- (26) Charleston, R. J., *op. cit.* 5ff.; 49ff.
- (27) Gummerus, H., *a. a. O.* 1469; Comfort, H., *RE.* cit. 1308; Id., *Econ. Surv.* cit. 192; Charleston, R. J., *op. cit.* 11; Hülsen, 'Arretium', *RE.* II (Stuttgart 1896), 1228; Westermann, W. L., *Slave Systems* cit. 92.
- (28) Charleston, R. J., *loc. cit.*

- (29) *Ibid.* 12.
- (30) H. コムフォートは A. オクゼ説に従って M. Perennius Tigranus が一群のヘレニズム陶工奴隷と共にアレクサンドリアの陥落後、「29～25 B. C.」の間にアレティウムに「移住」したと考えたが、《M・PE》；《M・PERE》；《M・PEREN》；《M・PERENNI》と共に、而もしばしば別場所に分離して《TIGRANVS》が捺印され、とりわけ M. Perennius が「属格」で現れた場合には、Tigranus はかつては「M. Perennius の奴隷」‘*Tigranus M. Perennii* [servus fecit]’であった可能性が強く、もしそうだとすれば、M. Perennius Tigranus が最初から自由身分の奴隷主として、「陶芸奴隷を率いてヘレニズム東方から移住した」とは考え難い。Comfort, H., *RE*. 1309; *Econ. Surv.* 194.
- (31) Comfort, H., *RE*. 1309.
- (32) Cagnat, P. et Chapot, V., *op. cit.* 449.
- (33) *Ibid.*
- (34) Gummerus, H., *a. a. O.* 1508.
- (35) Gummerus, H., *a. a. O.* 1508ff.; Comfort, H., *Econ. Surv.* 188f. Westermann, W. L., *Slave Systems*, 92.
- (36) Charleston, R. J., *op. cit.* 12.
- (37) Comfort, H., *RE*. 1319.
- (38) Frank, T., *Econ. Hist.* 225f.; Gummerus, H., *a. a. O.* 1465; Comfort, H., *Econ. Surv.* 194ff.
- (39) Charleston, R. J., *op. cit.* 16.
- (40) Charleston, R. J., *op. cit.* 17; Comfort, H., *RE*. 1319; Frank, T., *Econ. Hist.* 223; Rostovtzeff, M., *op. cit.* 161.
- (41) 例えば ‘*L. Rasinius*’ 銘は、なお北アフリカに現れ続けた。アレティウム=>T.-S.<が何時までアフリカに送込まれたか、H. コムフォート (*Econ. Surv.* 192) は「フラウウィー期」、R. J. チャールストン (*op. cit.* 17) は「アントーニーニ期」を推定するなど、必ずしも定かではない。
- (42) Comfort, H., *RE*. 1319; Charleston, R. J., *op. cit.* 17; Frank, T., *Econ. Hist.* 223.
- (43) Atkinson, D., ‘A Hoard of Samian Ware from Pompeii’, *JRS*. IV (1914), 27-64.
- (44) Dragendorff, H., ‘Terra Sigillata: ein Beitrag zur Geschichte der griechischen und römischen Keramik’, *Bonn. Jahrb.*, XCVI-XCVII (1895), 18-155.
- (45) Knorr, R., *Töpfer und Fabriken verzierter Terra-Sigillata des ersten Jahrhunderts* (Stuttgart 1919), 8-9. ロットヴァイル例に関する押印銘及び浮彫デザイン研究は、さらに、Knorr, R., *Südgallische Terra-Sigillata-Gefäße von Rottweil* (Stuttgart 1912), 1-50 u. Tafeln I-XXX を参看されたい。
- (46) Charleston, R. J., *op. cit.* 17.
- (47) Frank, T., *Econ. Hist.* 223; Comfort, H., *Econ. Surv.* 192.
- (48) Cn. Ateius 自身に加えて、アウグストゥス期以降、明らかにかれのアトリエを構成した多数の奴隷・解放奴隷がスタンプ銘を残した。*Amandus, Arretinus, Chrestus, Eron, Eros, Euhodus, Gormelus, Hilarus, Mahes, Narcissus, Ruf*(), *Salvius, Xanthus, Zoilus* がそれである。Comfort, H., *RE*. 1318. Vgl. *RE*. Suppl. III, 1745: ‘*Ateius*’ Nr. 3a.

- (49) Comfort, H., *a. a. O.* 1320.
- (50) *Ibid.* 1320f.
- (51) Knorr, R., *Töpfer und Fabriken* cit. 141ff. に収録された図版参照。
- (52) 例えば南部ガリアの>S,<母型(范)がマインツに現れるなど移動は頻繁であった。Charleston, R. J., *op. cit.* 17.
- (53) Knorr, R., *a. a. O.* 17ff.
- (54) Déchelette, J., *Les vases céramiques ornés de la Gaule romaine* (Paris 1904).
- (55) 註(45)に挙げた両著作の他、その後の収録例を加えたいま一つ、Knorr, R., *Terra-Sigillata-Gefässe des erstern Jahrhunderts mit Töpfernamen: 83 Tafeln mit 200 signierten Gefässen* (Stuttgart 1952)が挙げられ得る。
- (56) Knorr, R., *Töpfer und Fabriken* cit. 5-12: 'Chronologie'.
- (57) *Ibid.*
- (58) Comfort, H., *RE.* 1324.
- (59) Knorr, R., *ibid.* 5.
- (60) *Ibid.* 133-136.
- (61) Comfort, H., *RE.* 1329ff.
- (62) 生産の内的構造に関わるこの問題は、もはや別課題であり、いずれ別稿で触れられることになろう。